

財団たより

# 多摩川

1979. 9. 第3号



初秋の川原に咲くカワラノギク



拝島川原のススキ

## ■ 川のはなし ■

### ③ 川の自然性

川とはわれわれにとって何であるのか。それは都市の河川に対してばかり再認識を要求する問いではない。すべての川に対してわれわれはあらためて自然環境の一構成要素としての川への理解に立って、洪水処理や水利用の計画を樹立すべきであろう。すなわち、川は人間のために洪水の水を集め、人間に利用されるために水を流しているわけではない。われわれは川を洪水処理と利水についてのみ、最も都合の好い形にしようとして川に手を加えてきた。手の加え方が巨大になってきた今日、それが川の自然界に果たしている他の作用に深い影響を与えるようになってきた。その顕著な例は生態学的影響である。川の自然が、動植物の生存環境として果たしている役割は大きい。いうまでもなく、それは動植物の問題だけに止まらない。生態学的循環を通してわれわれ人類に影響を与えてくる。都市化がもたらす都市人口の急増は、都市

生活者の精神的やすらぎの場として、川の自然性の維持をいままでもよりはるかに強く、求めるようになる。

山間部の災害復旧工事にさえ、量的な洪水処理のみしか考えないような、鉄とコンクリートで固め幾何学的断面形状で蛇行を直線化した川の人工化が普及している。「慣れ」は恐ろしいもので、人々はそれが周囲の自然景観とバランスしないことにも徐々に気付かなくなってきた。幾分か富裕になった経済力を頼りに、鉄とコンクリートで峡谷部に固められた堤防は、一見自然を征服した人間の勝利のような錯覚を起こさせる。しかし、自然は次の大洪水の際にその下流方面に氾濫の形で報い、一方生態学的循環を通してジワジワと思わぬ方向からわれわれに報復するであろう。

(「国土の変貌と水害」1971 高橋裕 岩波新書)

## 多摩川散歩



### 是 政 ●

「省線武蔵境駅からガソリンカーに乗った。是政行きは2時間おきしか出ないのでしかたなく北多摩行きに乗った。そこから多摩川まで歩くのである。(略)ガソリンカーは動揺が激しく草に埋れたレールを手繰り寄せる様に駆けて行った。(略)線路にわかれると除虫菊の咲いた畑の裾を歩いたり桑の切株の並んだ砂畑を通ったりして荒地野菊の間を分け私達は多摩川の土手にあがっていった。」

小説家上林暁氏の随筆集「武蔵野」の中の「花の精」と題する随筆の、始めの部分である。この随筆は、上林暁氏が昭和13年の夏に、是政あたりの多摩川に訪れ、その風物を描いたものである。現在は下水の排水路と化したような沖積地の小川にすらも、澄んだ水が流れ、鮎が遊び、タナゴが鱗をきらめかし、シジミが砂を吹き、沢ガニが走り、そして夜は蛍が群がる川だった。多摩川砂利の搬出線として引かれた西武多摩川線が走る是政に近い一帯は、水田とクロマツ林、そしてニセアカシアの疎林と砂地のやせた畑、などが点在する見渡す限りの荒野であった。強い日差しをかえす砂利河原は、マツヨイグサやオオマツヨイ、メマツヨイグサといったいわゆる月見草が疎生しており、流跡の凹地のツルヨシの根方から始まる伏流水の流れは、オランダガラシ(クレイソン)が縁どり、オイカワやタモロコの稚魚が群がっていた。

「南部電車の鉄橋を2輛連結の電車が渡って行った。(略)川原の路を夜釣りの人が自転車を飛ばしてゆく。私は仮橋を渡り、番小屋の前に立って橋

賃を払いながら橋番の老人と話をしていた。」

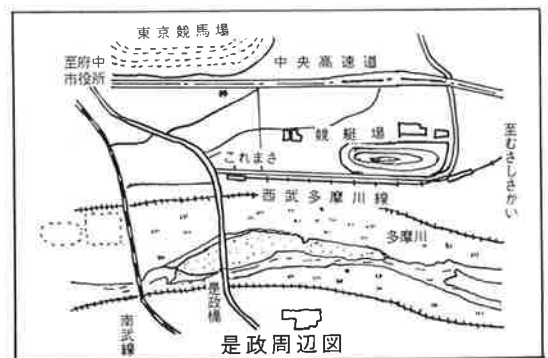
上林氏のいう仮橋は、現在の是政橋の所にあったもので、水の少ないときには仮橋を組み、増水すると渡し舟が往復していた。このあたりの渡しは是政のほか、上流の関戸や、下流の押立、調布、管の渡しなどがあり、近在の人々の往来や釣人たちがよく使ったものである。

いま釣人の遊ぶ是政河原は、当時、専門の漁師も多かった。産額の8割方は鮎であったが、ほかにコイ・ウナギ・ハヤ・ドジョウなども産した。川開きの6月1日午前零時を待つ釣人は土手に並んで焚火をし、花火を合図に本流に駆け込んで行ったものである。関東の長良川とまで称された鵜飼漁があったことを知る人も少なくなった。——時には芸妓をはんべらしめ三味線・太鼓に浮れ狂するもあり——と書かれた地誌もある。

上林暁氏の描く西武多摩川線は、乗客と一緒に自転車も乗せ、女車掌の吹く呼笛の音を残して、暗く寂しい是政の駅をあとにする。

「是政の駅からして月見草の駅かと思う程構内まで月見草が入り込んでいたが、驚いた事には今ガソリンカーが走って行く前方は全て一面、月見草の原なのである。右からも左からも、前方からも三方から月見草の花が……(略)」

こうして上林氏は、月見草の美しい印象に酔いながら是政を去った。今は昔、すでに是政橋もかかり、河原はランド化した所も多い。しかし今なお河原に道をたどるならば、随所に月見草との出逢いがあり、上林氏の描いた多摩川を発見することができるだろう。(曾根伸典)



## 「多摩川と私」

〈野毛の水神祭〉

平野 順治  
(朝日小学生新聞編集長)

7月22日の日曜日、わたしは世田谷区野毛一丁目にある六所神社の水神祭を見る機会を得た。

多摩川漁業協同組合世田谷支部と地元町会の主催で、「多摩川水神講」と白く染め抜かれた二本の幟りが、丘の上の風にはためいていた。午後三時、多摩川に三隻の小舟をくりだし、まず神官が禊いをしたあと祝詞奏上、各総代が玉串を川へ流して拝礼、ついで神官が御神酒を注ぎ、塩と洗米を献げて、とどこおりなく式典は終わった。

ほどなく、ねじりハチマキにフンドシー一本の若者たちにかつがれた神輿が、威勢よく土手から河原へ駆けおりて、「野毛の渡し」跡から多摩川に入り、小一時間も荒々しく水中で、もみ合っていた。流れの中央でも深さは胸乳ぐらいで、はねあがる水しぶきがキラキラと真夏日に映えて、まばゆいほどだった。船の上でかなでる「野毛ばやし」の音色も、野趣に富んでいて耳に心地よい。

大むかし、洪水のときに小さな祠が流れ着いた。府中の方から来たというので、土地の人が六所明神とあがめて一社を創ったのが、六所神社の縁起だという。多摩川と縁の深いお宮だ。

古老のひとり、昭和三年ごろ、神輿が新しくできたとき、あいにく祭りの日が雨で、神輿もかつぎ手もドロドロになってしまった。いつそのこと多摩川で洗ってこようと、かつぎこんだのが初めだというが、そもそもは聖なる川の水で神輿を浄め、悪霊を祓うという、夏祭りが本来もっている儀礼ではなかったろうか。十年ほど前はヘドロで悩まされたが、近ごろは流れもきれいになって

助かると、人びとは心から喜んでいた。

多摩川に神輿をかつぎこむ行事といえば、羽村の稲荷神社の春祭りが知られているが、これはそれほど古いものではなく、日差しの暑さに耐えかねて入水したのが、その起こりだといわれている。

ところで野毛の荒神輿は、多摩川に入る前、町内を巡行、最後に丸子川（むかしの六郷用水）ぞいの道を、上流へとさかのぼっていった。この道は、むかしの「<sup>いざ</sup>筏道」である。

筏道というのは、江戸初期から大正末年まで、多摩川に筏流しが行われていたころ、筏を河口近い六郷まで届けた筏乗りたちが、三々五々、奥多摩へと帰りを急いだ道のことで、六郷から沢井まで歩いて十六里(約64キロ)といわれる。

東京西南部の地図を見ればわかるように、東海道をはじめとして平間街道、大山街道、鎌倉街道などの主要な道は、ほとんど南北に走っている。これは過去の歴史が描いた政治、経済、文化の流れを示すものであるが、東西を結ぶ道路には、まともなものが一本もない。それだけに、多摩川にそって東西にのびる筏道は、細々とした地味な道ながら、流域の人びとにとっては、その暮らしに密着したかけがえのない便利な道でもあったわけである。

そうした過去の記憶をよみがえらせて、筏道の神輿巡行を重く視ているところにも、野毛の水神祭のゆかしさがあるように、わたしには思われてならなかった。

### 〈編集室だより〉

この夏、多摩川の堰の調査をしていましたら、いたる所で楽しい水遊びの光景に出会いました。しかし、悲しい水の話もいくつか報告されています。川遊びを楽しみ、事故のないようにするためには、何より川の事を良く知っておく事です。

財団で作製しました「川」という雑誌はすでに4000部ほど配られています。まだまだ在庫があります。多くの皆さんに

少しでも川を知っていただこうと、わかりやすくまとめてあります。グループでの学習会や自然観察会等で活用して下さい。そして、すでに使っておられる方で、どのように役立っているか、こういう点で利用できる、などの情報がありましたら財団までおたよりを下さい。



(西秋川のゴミ埋め立て場)

### 〈西秋川清掃センターを訪ねて〉

改めて言うまでもなく、都市がはき出すゴミは、年ごとに増え続け、その対策にはどの自治体も頭を痛めている。四、五年前、東京でさかんに議論されたゴミ戦争は、今はなりをひそめてはいるが、東京湾のゴミ埋め立てに限界が見えはじめていることから、いつ又、再燃するかわからない。

多摩川流域の市町村とて、最近の人口急増によるゴミ処理問題は深刻な事態を迎えつつあるが、つい先日、五日市市にゴミ処理場としては、二次公害を防止するように設計された処理センターが始動しはじめた事を聞き、取材に行ってみた。

秋川と北浅川にはさまれた加住丘陵の北斜面、五日市市高尾に西秋川衛生組合による高尾清掃センターがある。このゴミ処理場は、五日市、秋川市、日の出町、檜原村の四市町村が共同で建設したもので、ゴミの一括処理と二次公害の防止を目的とした近代的な施設である。ゴミ焼却によるばい煙防止、防臭装置、冷却水や発生汚水の再利用施設、それに、焼却後に残る灰の完全埋め立て場を持っている。各都市にあるゴミ焼却場の公害防止施設、最近ではかなり改善されてきているが、焼却後の灰は直接埋め立てる事が多く、水の汚染や土壌の汚染につながる事が多かった。この処理場の特徴はそこにある。つまり、焼却灰を埋め立てる事によってしん出する汚水が土壌や地下水等

の汚染を防ぐための対策が講じられている。焼却灰の埋め立て地は、焼却場から1.5km程離れた同市網代にある。丘陵の谷にえん堤を築きダム形式の埋め立て地をつくり、その底に約1.5mmの厚さの不透水性まくをはってある。そこで、雨水などによって発生する汚水は、えん堤の下方にあけられた排水口から外に出し、埋立て地の端にある汚水処理場で処理された後、川に放流される。この汚水処理は3次処理まで行なわれ、BOD値にして約5ppmまでになるそうである。このような施設をそろえたのはおそらく全国でも始めてだろうと言われているが、ここでもやはり頭を悩ます問題がある。それは、プラスチックや合成樹脂でできた容器類は、焼却すると極めて高い熱と有毒ガスを発生する為、焼却ができず、そのまま埋め立てざるを得ないのである。埋め立て地の大きな穴をのぞいて見ると、色とりどりの容器類がかなり目立っていた。この埋め立て地は、現状のゴミ増加率を見込んでも、約40年間は間にあうそうで、将来は谷をさらに奥まで広げる事が可能だという。たしかに、この施設は、二、三年前、羽村町や瑞穂町が経験した、生ゴミの埋め立てによる地下水汚染や悪臭の問題はいくらか解決されそうであるが、決して土に戻ることのない物質が、大きなゴミ袋に入れて放置される事と等しいとすれば、やはり、根本的な何か私達の生活の中に欠如している事は否定できない。この埋め立て地を造成中に、ナウマン象の化石が出土したそうである。その話を聞いた時、今捨てられているゴミが数万年後に掘り出されるとすれば、未来の考古学者は何を考えるだろうかと気になった。

処理場の所長の話しの中に、ひんばんに聞かれた言葉があった。それは、「この仕事にたづさわって、何と人間はおろかな事をしているのだろう。処理しようと思っても処理できないものが多すぎる。技術的には不可能でないにしろ、根本的な発想を変えないかぎり、いずれは自分の首をしめる事になるはずだ。」と。ゴミ処理の現場で働く人の本音にちがいない言葉であった。

## 財団の事業紹介

### 〈研究助成〉

昭和54年度（第1次）研究助成課題が、このほど決定しました。今回決定した研究は継続研究17件、新規研究4件、合計21件です。研究助成課題

は次のとおりです。

なお、今年度は助成金の枠がまだありますので研究をなさりたい方はお問い合わせ下さい。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
(A類研究)		
環境浄化のシステム分析	高 橋 三 雄	成蹊大学経済学部助教授
多摩川水系の底生生物相の分類学的研究	松 本 浩 一	東京都立衛生研究所副参事
多摩川集水域および沿岸汽水域(東京湾の一部)におけるエコロジカル・プランニングの方法と実践	磯 辺 行 久	工学院大学建築学部講師
多摩川水系における水生生物生産システムの解析と生産力のアセスメント	多 紀 保 彦	東京農業大学育種学研究所主任研究員
河川環境に関する計画的な研究	進 士 五 十 八	東京農業大学農学部講師
多摩川上・中流における水温の実態とその形成機構に関する研究	西 沢 利 栄	立教大学文学部教授
多摩川流域の蝶類保護に関する生態学的研究	三 島 次 郎	筑波大学生物科学系講師
玉川上水系に関わる用水路網の環境調査	渡 部 一 二	多摩美術大学建築科講師
多摩川およびその周辺地域の植物に含まれる微量金属	一 國 雅 巳	東京工業大学総合理工学研究所教授
多摩川水系・大栗川流域の生態系動態に関する地域生態計画学的研究	黒 川 直 樹	東京都立大学工学部助手
多摩川水質に影響をおよぼす基礎的因子の解析	今 岡 正 美	山梨大学工学部教授
多摩川水系に於ける川漁の技法と習俗	安 齊 忠 雄	安齊宣伝研究室代表
多摩川水系のアメニティ構造解析に関する研究	杉 尾 伸 太 郎	(株)プレック研究所社長
多摩川の水質評価とその将来予測に関する研究	三 島 昌 夫	国立公衆衛生院室長
不飽和浸透流の汚水処理機構とその応用に関する研究	八 幡 敏 雄	明治大学農学部教授
多摩川およびその流域における栄養塩・有機物の生物地球化学的研究	小 倉 紀 雄	東京農工大学農学部助教授
多摩丘陵における水循環機構と都市化による変化に関する研究	虫 明 功 臣	東京大学工学部助教授

(6)

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
〈B類研究〉 多摩川水系の水質について	浜 谷 光 昭	神奈川県立向の岡工業高校教諭
多摩川の水質汚濁	宮 崎 一 郎	法政大学第二高校教諭
水質調査と環境教育	前 田 穂	東京都立教育研究所指導主事
多摩川沿いの多摩丘陵東縁部の地下水の性質	青 柳 隆 二	川崎市立宮崎中学校教諭

〈助成集報(第2巻)〉

助成集報(第2巻)が完成しました。

7件を取りまとめたものです。

現在まで52件の調査研究について助成をおこない、15件の成果が得られました。その内7件については創刊号で紹介をいたしました。今回は次の

助成集報は財団事務局にそろえてありますのでご参考になさりたいかたはお問い合わせ下さい。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
多摩川中流域の水質変動を再現する数理モデルの開発と計算機シミュレーションによる汚濁対策効果の検討	合 葉 修 一	東京大学農学部教授
多摩川における河川空間の整備に関する基礎的研究	篠 原 修	東京大学農学部助手
多摩川水域の細菌叢の研究	新 井 俊 彦	慶応義塾大学医学部講師
多摩川水系のユスリカ相と水質に関する調査研究	森 谷 清 樹	神奈川県衛生研究所生活環境部長
多摩川上流域における水源林の理想的あり方についての調査研究	西 沢 正 久	九州大学農学部教授
多摩川流域における陸上動物(昆虫, 両生, 爬虫, 哺乳類)の生態学的研究	三 島 次 郎	筑波大学生物科学系講師
多摩川における人為圧が野鳥におよぼす影響について	市 田 則 孝	(財)日本野鳥の会事務局長

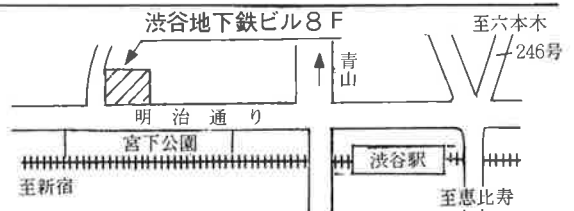
〈多摩川河川敷植生図〉

「財団だより」第2号で、多摩川河川敷植生図(1/5000)のカラー印刷が完成した旨紹介しました。要望が多数ありました。印刷部数の関係で今後要望者全員におわけできかねますので貸し出し用のパネルを作成しました。持ち運びが便利に出来て

います。ご利用下さい。

又、専門的な研究や分析等に利用できる様に青焼き用原図も用意してあります。ご必要の方はお問い合わせ下さい。

- 発行日 昭和54年9月4日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (0488)31-8125